

曇時々晴

曇時々晴

串田孫一

曇時々晴

一九九一年三月二十日 初版第一刷発行
一九九一年七月一日 第三刷発行

著者 串田孫一

発行者 増田義和

発行所 実業之日本社

東京都中央区銀座一―三―九 千一〇四
電話(〇三)三五三五―四四四一(営業)

(〇三)三五三五―二三九一(編集)
振替 東京 一―三二六

印刷 大日本印刷株式会社
製本 共文堂製本所

目次

御負けの虫眼鏡	冬の或る夜	蜃気樓の夢	山上の麴麴	植木鉢	乗り遅れ	紹介状	最後の夏	晝休み	昔を今に	犬の鎖	曇時々晴	障子のある部屋	最初の嘘
---------	-------	-------	-------	-----	------	-----	------	-----	------	-----	------	---------	------

...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...
100	93	86	79	72	65	56	49	42	35	28	21	14	7

隣の人	107
空気銃	114
旅立つ火の粉	123
空を知らなかった鳥	130
内面の平穩	137
花莫塵	144
丘の道と川の辺	151
故障	158
赤と黄色の光	165
薔薇窓のない教会	172
古版画 牧人曆 九月	63
古版画 牧人曆 五月	121
後記	180

曇時々晴

御負けの虫眼鏡

美術を専門に研究している人と、千三百年近く前に描かれた絵の写真をあれこれ見ながら話をしていた。私にとっては初めて聞く話で、その発見の際の経緯^{いきまつ}についても、描かれた絵の内容についても、単に興味を抱かされるだけでなく、屢々^{しばしば}驚嘆の溜息を洩らした。

絶対に人の目に触れない場所に、悪戯ではないにしても恐らく気紛れに、無造作に描かれたものだが、その時代の人の自然観を証明する絵として貴重であり、このことを専門家の間だけでなく、少し廣く一般に知らせたい意向が固められた。

この絵を多色刷の印刷にする場合の話になり、その場を用意されていた画集の類を見ながら、少し技術的な相談に移っていた時、その美術研究家は画集の中の一冊を展げて暫く眺めていたが、上衣の隠しから小さい擴大鏡を取出し、身を屈めてその一部分を真剣な表情で調べていた。そして恐らく納得したらしく、また事もなげに擴大鏡を隠しに戻して話を続けていた。

美術の研究をしている人達はみんなこうして小さい擴大鏡を常時持ち歩いているとは限らないだろうが、私はその容子を見ていて、なかなか洒落た心掛けだと感心した。決して珍しい上等な擴大鏡ではないが、何気なく使つて見せられると、成る程と思つてしまう。

この時の相談はうまく纏まらなかった。だが私にとっては昔の、或る時代の人の考え方などいろいろな教えられたと同時に、まるで景物のようにこの擴大鏡のことが印象に残つて忘れられない。

*

私自身の持つてゐる擴大鏡のことになるが、この文章はそれを題材として選んで書き始めた訳ではない。

最近、細かい字の本を読まなければならなくなり、ずっと以前から持つてゐる擴大鏡を抽斗から出してずっと机の上に置いてある。虫眼鏡と言つた方が似合うようなものである。

この虫眼鏡との附合いも随分長くなるが、実は自分で買つたものではない。拾つたものでもない。

戦争が終つて三年四年たち、少し無理をしながらも旅に出られるような状態になった。戦争の痛手を蒙つていない山中の道を歩き、もつとそれ以前に越えた峠を訪れた。戦争などとは全く関係なく健かに生きていた野山の草木に囲まれて一日二日を過ごしているうちに、自分をも当然含

めた人間の愚かさが、曇り空からの鈍く低い鐘の音のように響いて来る。

戦いを放棄したこの国に、確かに薄陽は当たっているようにには思うけれど、この明るさを擴げて行くような努力は見られず、ただ齷齪と目前の、ちらちらと目紛しく飛び交うようなもののばかりに心を奪われている。

私はそんな時に、戦死をした身近かな人達のことを次々と想い浮かべた。行方が判らなくなつて、ひよつとしたら突然竄れた姿で現われるかも知れない友人を含めて、彼らに向つて言う可き言葉など、私には到底想い附くどころではなかった。

狂つた戦いに否應なしに連れ去られた彼らは、自ら命を絶つことさえ出来ず、止むを得ず狂つて戦い、一瞬にして斃れた。傷附いて叢に倒れ、草の茎を無心に這いのぼり、鞘翅を展げて澄み切つた空へと飛んで行く虫などを眺めながら、最後の切れ切れの想いに苦しんだかも知れないなどとは思いたくなかつた。

古い峠の、冷い冬の風に吹かれながら、密かな弔いを企て、追憶に耽るのは辛くはあつたが、生き延びている限りはこんなことでもして自分を支え、慰めるより他に方法がなかつた。それでもなお心に残るものは相変らず重くはあつたが、もともと、さばさばとした気分になつて日常生活に戻る筈もなかつた。

*

峠を下り、山麓の村を通ると犬が遠くで私の姿を見て吠えた。夕暮に近く、犬の声は冬枯の雑木の低い尾根に飴した。そして灯のともり始めた町に入り、その晩の宿をこの町で探そうか、それともひと先ず駅へ行つて列車の時刻を調べようかなどと思案をしながら歩いていると硝子戸の締っている文房具屋があった。

最初何を買うというあてもなく、立て附けが悪い戸をあけて入ると、短く刈った髪にも眉毛にも白毛が目立つた主人が奥から店へ出て来た。近くに小学校か中学校でもあるのか、学用品が多く、幼い子供達のためらしい玩具に近いような品物も並んでいた。戦火を蒙っていない地方の町なので、この店にも懐しい物がいろいろあった。

私がこれとは思つて棚から取り出してみる物は、殆どが戦争の始まるずっと以前に仕入れた、都会で新しく製造される物よりも質のいいもので、懐しさと、急に思い附いた必要に迫られた氣持で、こまごました文房具を買った。決して無駄な買物はしなかつた筈だが、一つ一つ値段を算盤に入れながら、その主人が自分で貼つて作つた紙袋に入れて呉れた量は旅の途中の買物にしては可なり多かつた。

その時最後に、この虫眼鏡を一つ御負けに入れて置きます、と言つて私に呉れたのである。

思い掛けない厚意に私は悦び、悦んでいる私の容子を見てその主人も満足そうであつた。戦争で家が焼けてしまったので、もうそれから大分月日がたったのに、手許に当然あると思つていた

ものが焼失していて、未だにまごつくことがある、などと話した。別段同情して貰う積りで話した訳ではなかったのに、主人は、私は家は焼かれなかったが、一人息子を戦死させてしまつて、これはなかなか諦め切れないものです、と俯き加減になつて瞬きを何度かした。私にはそれを慰める言葉が探せなかった。どんな言葉を使つても空々しく聞こえるように思えた。

その主人の顔もはつきり記憶してはいるが、その当時の年恰好からざつと計算をしてみても、今はもういない。その時買つた手帳やその他の物はもうすべて使い果してしまつたが、御負けに貰つたこの虫眼鏡だけがいつまでも手許にあつて役に立っている。

*

景品と言ひ、景物と言ひ、御負けと言ひ。少々旋毛^{つむじ}曲りは、景品を附けて呉れるのはいいが、それだけ品物の値段を高くしてあるのだらうと文句を言うかも知れないが、一般には物を買つて景品が附いてゐると、極く單純に嬉しくなり、得をしたような気分になる。お菓子類^{はかり}を秤で買ふ時、ほぼ正確に量つてから二粒三粒を袋に入れるというのも商売の一つの要領である。僅かでも値を引いて呉れるのも、特殊な場合を除いて悪い気分はしない。

景品を附けるのはその店の販売を促進するための工夫だと言つてしまえばそれまでであるが、そうと判つていても景品を集めて溜めて行くのが楽しみな場合がある。

先ず子供達を誘ひ込むのが容易で、私も小学生時代にキャラメル^{キャラメル}の函の中に入つてゐる動物カ

ードを蒐集した記憶がある。同じカードが出て来ると友達と交換し合って種類を増やして行った。グリコの景品に興味を抱いたのは私達よりも少し後から生まれた人達であったが、この景品などは、時代をはっきり反映している物が極めて多く、今これを揃えて持っていたら大変な蒐集品である。

私の知っていたお爺さんが、孫娘のためにグリコを買ってやっていたが、景品が面白くなり、孫娘から景品だけを取り上げて書斎の書棚に綺麗に並べていたのを想い出す。そのお孫さんはもう立派な母親になっているが、このことを憶えていて、お祖父さんのためにグリコを買って頂戴と言いつけなければならなかった妙な経験が私にはあった、と顔を顰めながら笑っていた。

ひと頃、幼稚園の近くの往来に、お菓子が入ったままの袋が沢山落ちていたので、幼稚園の園長さんに尋ねたことがあった。園長さんの説明では急にいろいろのお菓子に御負けが附くようになり、ただただ御負けが欲しくて親に買って貰うが、お菓子の方はさっぱり魅力がないので、道に捨てて行くのだそうである。

大変な時代になってしまったと思ったが、大人相手の景品も次第に大袈裟になり、クイズや抽籤に據って高級自動車が当たったり、海外旅行に行けてしまったりする。何處か判らないところで何かの商品の販売促進には巧みに繋っているのかも知れないが、幼い子供達のしていることばかり八の字を寄せてはいられない。

*

私は机の上に今も置いてある純粋な御負けの虫眼鏡を眺め、遠い過去の冬の旅を想い出す。そして自分が現在していることで、人にも悦ばれ、自分も亦気分が爽快になるような御負けの名に値する行為とはどんなことを考える。

十枚と言われている原稿を、今月は特別に御負けを附けて十三枚書きました、と言って渡せば編集部は困ってしまう。今続いている放送でも、今日は御負けに三分餘計に話をしようと思っても、それは混乱のもとになるだけである。私のしていることは景品の附けられない仕事なのだろうか。景品の代りに、少しでもしっかりと文章を綴る以外に方法はないのだろうか。それは勿論ひと時も忘れてはならない心掛けである。

江戸時代には山東京伝、滝沢馬琴、十返舎一九などという人が、開店や大売出しの際に景物本を書かされ、これが配られたようである。それを考えると、方々の会社の宣傳雑誌に書く文章は、結局は景品として使われていることになるのかも知れない。

冬の或る夜

寒い晩が続いている。体の方もすっかり冬という季節に慣れたせいもあろうか、日中は然程にも感じないばかりか、外に出て何となく通りがかりに眺める習慣になっている何種類かの木々の枝先の、春を待つ芽が、心持膨らんで来たようにさえ思えるが、太陽が沈む頃になると急に冷え込んで来る。それにこれも毎年のことで、夕方から風が強まって来る。折角日脚が延びて来たことも判るのだから、窓からの薄暮の眺めを楽しみたいと思っても、隙間からの吹き込む風が顔や襟元に感じられると、早々と雨戸を閉めてしまう。

だが冬の間ずっとそうであったが、早目に戸締りを済ませてしまつてからの夕食までの時間が、案外仕事が捗る。一日の大部分の時間を机に向かつていられたような時には、そして豫定していたよりも早く仕事が進められた時には、運動を兼ねて家の中の掃除をするのも夕刻の過ごし方ではあるが、こんなに冷たい風が強まって来ると如何にも戸を開け放つての掃除には不向きである。